

ふらんす 1994 - maiVS

(cinquante et un) 51

●「リポート / 北京コロックに参加して(本誌 93 年 12 月号)を読んで」

稲賀繁美

最近では先方の招きで中国「視察」に出掛ける風潮が、日本の大学教師にもすっかり蔓延している風情であるが、あいもかわらずのお客さんの物見遊山気分と国際的視野の欠如が、いったい先方にどう映っているのか、すこしはお考えのうえで行動していただきたいものである。現在の地球における日本の責任などという大仰な演説をぶつつもりはないけれど、本来この国が音頭をとって今やっておかなければもう二度と不可能なはずの文化事業にたいして、この国のインテリ集団のはしぐれであるべき語学教師たちはあまりに無感覚なまま過ごしてきたように思えてならない。もはや手遅れというのが正直な診断だが、ふと気がつけば、依然として文化五等国のままの情報貧乏国は、経済の面でも、もはやアジアにおいて——つまり世界において——急速に過去の存在となりつつある。戦後半世紀近く政治的対米依存、国連追従の没国際感覚と、業績拡大・販充膨張しか念頭にない無軌道な経済活動を固是とする漫倫理観に染め上げられて、近視眼的な自転車操業を繰り返したあげく、ふと気付くとそうした暗黙の前提はすべて破算となっており、しかもヨーロッパやアメリカ合衆国がそれで食いつないでいる、文化的な支配——国際機関と称するものの設計および運転ノウ・ハウの独占——への参画は、これまでの他人任せのつけでまったくゼロ(明石ラヴ・コール

や緒方フィーヴァーがその良い証拠)。パブルのおりに浮ついたイヴェントとやらの花火は打ち上げたものの、近隣諸国とつきあってゆくための恒久的な制度作り、人脈作りはまったく手付かずのまま、いまや文化事業への投資も冷え込んで、打つ手もなくなった。そんななかであいも変わらず「朝貢貿易」のお招きに預かって外価獲得に奉仕しているのが、昨今の中国出張ばやりなのだ。

大企業のサラリーマンのみならずトップの経営者ですら国内での身の保身に走るばかりで、外国のことなど商品の売り付け先として以上にはまともに考えず、日米財界人会議に通用する人材すら払底したままのところ、終身雇用制の神話も当然ながら揺るぎはじめ、日本国内に限定された視野ではもはや到底帳尻の合わせようもない年金・保険制度や労働力供給の破産状態にひたすら目をつぶって姑息な延命策を弄する有り様。ましてわんや、もとより受験戦争という競争原理の虚焦点でありながら、その内部はまったくの空洞と化していた大学の教員が、昭和六〇年代まで続いた極端な海外渡航制限もあって増った、日本の国内学会以外のどこにも通用しない無能力ぶりを、海外で恥ずかしげもなく開陳しはじめている。その「空振り」、正視に耐えなない。また、それを助長する外務省や文部省の消極性など、國家公務員は「自肅して」口を慎むべきなのだろうが、いった

52 (cinquante-deux)

い北京のイタリア大使館やフランス大使館の熱心な文化政策への投資(とりわけ儀式には終わらぬ内実ある人的交流)ぶりを横目でご覧になって、何と心得ておられるのか。寒心に堪えない。

中国はもとより実学の国である。文人気質も物質的安定と、政治的野心の裏面としてはじめて発揮される。そもそも最近まで「友誼賓館」一泊の宿代は中国の大学教授一ヶ月の給料に匹敵した。「洋書」購入ひとつ満足にできない研究環境、経済状況にある隣国のインテリたちの苦悩も知らず、彼らとなら「切り結ぶ面もない」、日本人の日本人による日本人のための——そしてフランス本国での国文学研究のママゴトのような——営みに自足して、これを自閉症的に縮小再生産していればよい時代ではもはやない(戦前のエリート教育のほうがまじだった)。日本語でも中国語でもない中立の言葉であるフランス語を操れる日本人として、宗主国フランスの言語政策への帰属を離れた地点で、アジアの将来を——とりわけ外国語・外国文化教育という視点から——東アジア諸地域のインテリと開襟を開いて五角に論ずる絶好の機会を提供されながら、「フツブン」の世界しかご存じでなく、中国訪問に必須の知識も当然知りおくべき知己もなく、中国情勢のここ数年の劇的変貌への完璧なる無知と、複雑な人間関係・力関係を裏に隠している生臭い現場への観察力の欠如を暴露するだけの、受け身で無能な「お客さん」を演じるばかりか、将来への展望もなく、交流の実も本来この接触で果たすべき責任も棚上げのまま場違いな「学

会発表」にご満悦のうえ得々と幼稚な観光旅行報告をなさるのは、もう願ひ下げにして戴きたい。

「今回の旅の主要な目的に触れるのをあやうく忘れるところであった」といったご韜晦を発揮して歌仙を巻く余裕がありなら、自分たちの物質的潤沢ぶりをこれ見よがしに見せびらかさんばかりのブルジョワ的文人趣味をやんわり批判されたなどと筋違にも思い込んで情緒的かつ小兒的な反発などされず、むしろフランス語を操れない学生を巢立たせ、操れる学生は巢立たせない(つまり実学の世界には必要な数のフランス語遣いを送り込まず、学会の中では学会にしか通用しないように調教して潰してしまう)ことのみをその理念なき生業とし、輸入一方で発信源となる訓練もせぬまま、いざ外国に出てみれば主張なき「儀礼」しかこなせぬ「顔なき日本人」、というご自身の体質を、他人行儀ではなく、教育者としてすこしはまじめに反省されてはいかなものか、その先にはじめて、現代中国の実用・金儲け一点張りを使命とする風潮のなかで外国語教育のかかえる——そしてその担当者が公式見解とは裏腹に悩んでいる——ゆゆしき問題点を、日本人とか中国人とかといった時代遅れのナショナリズムにとらわれた対抗意識を越えて、世界的視野にたつて冷静に指摘する見識も育って来るはずである。そしてそうした場を創設するのが二〇世紀最後の日本 FIPF に課せられた、大切な課題なのではなからうか、妄言多謝。

(三重大学人文学部:投稿)